

延岡市立熊野江中学校の学力向上への取組

1 学校の概要

本校は、延岡市の北東部に位置し、校区は北浦町に隣接する。生徒数は年々減少し、現在 10 名の小規模校である。

隣には熊野江小学校があり、ともに熊野江地区と須美江地区を校区としている。小学校とは、運動会や文化祭、持久走大会などの行事を合同に行うなど、連携して教育活動に取り組むことも多い。

また本校は、豊かな心を育むとともに、学習する場に適した環境をつくるために、花づくり活動を生徒と職員が一丸となって取り組んでいる。

資料 1. 生徒数・職員数（平成 17 年 10 月現在）

	生 徒				職 員					
	1 年	2 年	3 年	計	校長	教頭	教諭	養護教諭	市職	計
男 子	2	—	2	4	1	1	3	—	—	5
女 子	2	2	2	6	—	—	2	1	1	4
計	4	2	4	10	1	1	5	1	1	9
学 級	1		1	2	非常勤講師 2					

資料 2. 最近の花づくりの結果

年度 (平成)	コンクール	成 績
1 3	全国花いっぱいコンクール	県最優秀賞
	延岡市小中学校花壇コンクール	特別賞
1 4	全国花いっぱいコンクール	県優良賞
	全国花のまちづくりコンクール	花のまちづくり優秀賞
	延岡市小中学校花壇コンクール	特別賞
1 5	全国花いっぱいコンクール	県優良賞
	延岡市小中学校花壇コンクール	最優秀賞
1 6	全国花いっぱいコンクール	県優秀賞
	延岡市小中学校花壇コンクール	優秀賞

2 児童生徒の実態

個々の生徒を見ると差異も見られるが、授業に臨む姿勢は、概して良好である。これまでの学力に関する諸検査でも、比較的よい結果を残している。その理由として、次のようなことが考えられる。

- ・ 生徒は、常に少人数で授業を受けることができる。
- ・ そのため、学習内容について躓いた際、すぐに教師から指導を受けることができる。
- ・ また、学力に応じ、一人ひとりの生徒が事後の指導を受けることができる。

しかし、そのようなよい結果を残してはいるものの、基礎的、基本的な知識や技能の欠如が目立つ。それには、次のようなことが理由として考えられる。

- ・ 家庭学習の習慣が定着しておらず、家庭での学習時間も短い。
- ・ 自主的に学習に取り組もうとする態度が身につけていない。
- ・ このようになった背景には、小学校時代から少人数の学級や限られたグループで過ごしたために、学習面で競う機会に恵まれなかったことがある。

3 学力向上に向けた経営方針

(1) 学校経営について

本校の学校教育目標は、「心豊かで知性にあふれ、個性豊かにたくましく生きる力をそなえ、心身ともに健康な生徒の育成」である。この目標のもとに 7 つの努力事項を設定している。その 1 番目に、「基礎・基本の確実な定着」を掲げている。また、4 番目に「現職教育の充実」を掲げ、「学力向上を課題として基礎的、基本的な内容の定着を図る指導方法の工夫改善に取り組む」ことを挙げている。

(2) 校内研究について

本校の研究紀要によると、昭和 62 年度から在籍する全教諭による教科研究が行われている。また、平成 15・16 年度は、校内研究の研究主題を「基礎・基本の確実な定着を目指した教科指導の工夫」として学力向上に取り組んだ。

本年度も、これまでの取組や努力事項を踏まえ、「学力向上を目指した学習指導の在り方」を研究主題に設定し、基礎・基本の定着を教科研究で、応用力の育成を一週間サイクルの学習指導で図ることにした。

資料 3. 研究紀要に見る各教科研究の実績

	国	社	数	理	音	保	技	英
S62～H12	○	○	○	○	○			○
H13	○	○	○	○	○		○	○
H14～H15	○	○	○	○			○	○
H16	○	○	○	○		○※1		○
H17※2	○	○	○	○				○

※1 保健体育では、教頭が体育の授業、養護教諭が保健の授業を行った。

※2 平成 17 年度の研究紀要は年度末に完成予定。

4 教育課程内の取組

前述の通り、基礎・基本の定着を目指し教科研究に取り組んできた。ここでは平成 16 年度及び 17 年度の教科研究の概要を述べることにする。なお、16 年度は「書くことを中心とした表現活動を通して」を副題にしている。

(1) 平成 16 年度の教科研究

① 本校の生徒に身につけさせたい力の明確化

研究主題や前年度の教科研究の結果を踏まえ、本校の生徒に身につけさせたい力の明確化を図った。その際、教科研究を推進しやすいように、3 つの項目を設けた。

資料 4. 身につけさせたい力の例（理科）

項 目	内 容
身につけさせたい力	・自然の事物・現象に関する、観察、実験を行うことができる。 ・観察、実験の結果から規則性を見だし、図や文章として表すことができる。
書くことを中心とした表現活動の場	・問題解決に向けた過程をノートに記録する。 ・自然の事物・現象のスケッチ活動をする。
指導のあり方、手立て	・観察、実験を行った際に、気付いたこと・疑問に思うことなどを記録させる。 ・実験の結果生じた、新たな疑問に関しても積極的に記入するように指導する。 ・単元のまとめの時間には、重要語句のつながりを図にまとめさせる。

② 各教科の具体的な研究

各教科で身につけさせたい力を明確化したうえで、具体的な指導の工夫を考え実践した。紙面の都合上、すべて書くことはできないので、各教科の副題を載せておく。なお、各教科の研究主題は、校内研究の研究主題と同じ、「基礎・基本の確実な定着を目指した教科指導の工夫」である。

資料 5. 教科研究の副題（平成 16 年度）

教 科	副 題
国 語	書くことを中心とした言語活動を通して
社 会	文章化の場を取り入れた学習過程の工夫
数 学	授業における書く活動を生かした指導場面の設定を通して
理 科	「かく」ことを取り入れた学習過程の工夫を通して
保体（体育）	学習ノートにおける課題意識を持たせるための支援のあり方
保体（保健）	書く活動を取り入れた学習過程の工夫
英 語	書くことを中心とした学習活動の工夫

(2) 平成 17 年度の教科研究

平成 17 年度は、16 年度の成果を踏まえつつ、基礎・基本をさらに定着させることにした。そのため、「本校生徒の実態から見て、本校生徒に特に身につけさせたい力とその手立て」の明確化を図り、研究に取り組んでいる。

5 教育課程外の取組

平成 17 年度の校内研究では、応用力の育成として一週間サイクルの学習指導に取り組んでいる。また、テスト前に学習充実旬間を設けたり、「生活の記録」を活用したりして、家庭学習の充実を図っている。ここでは、この 3 つの取組について述べることにする。

(1) 一週間サイクルの学習指導

① 3Eタイムと応用問題

平成 14 年度から、水曜日の 5 校時終了後の 20 分間を 3Eタイムとしている。この時間は、基礎・基本の確実な定着を目指して、設けられたものである。本年度は、この 3Eタイムを応用力育成の時間として活用することにした。そして、継続的に応用問題に取り組むことにした。応用問題として、各生徒に『最新高校入試問題集 2005 年度受験用』を 5 教科分（国・社・数・理・英）与え、活用している。

資料 6. 1 学期の進行状況

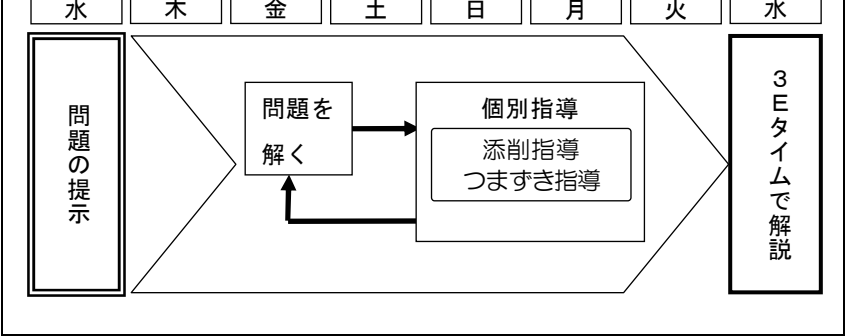
	4 月			5 月			6 月					7 月		
日	13	20	27	12	18	25	1	8	15	22	29	6	13	20
3 年	説明	数	理	英	国	社	数	理	英	国	社	修学旅行	数	理
2 年		社	数	理	英	国	社	数	理	英	国		社	数
1 年		国	社	数	理	英	国	社	数	理	英		国	社

② 一週間の流れ

水曜日の 3Eタイムを基準にして、一週間のサイクルを構成している。

水曜日に問題（課題の範囲）の提示がある。それを受け、生徒は問題を解き、その教科の教師に提出。それに対し、教師は個別指導をしながら、次週の水曜日の 3Eタイムまで継続して指導する。そして、3Eタイムで、解説を行う流れである。なお、生徒の学習状況を把握するために、掲示板（ホワイトボード）を活用している。

資料 7. 一週間サイクルの学習指導の流れ



資料 8. 掲示板（ホワイトボードの活用）



(2) 学習充実旬間

学習充実旬間は、4 月及び定期テスト前の自宅での学習状況を改善するために、平成 8 年度から設けている。本年度は、学習充実旬間の掲示板を設けるとともに、学習委員会の活動を通して啓発している。

旬間中は、朝の会の時間に生徒は、前日の宅習時間及び宅習ページ数を、掲示板の自分の欄に記入している。また、それぞれの項目の最も優れた生徒を、学習委員会で表彰している。

資料 9. 学習充実旬間（平成 17 年度）

時 期	期 間
4 月（年度初め）	4 月 18 日 ～ 4 月 28 日
1 学期中間テスト前	6 月 13 日 ～ 6 月 27 日
2 学期中間テスト前	9 月 26 日 ～ 10 月 5 日
2 学期期末テスト前	11 月 14 日 ～ 11 月 29 日
3 学期学年末テスト前	2 月 6 日 ～ 2 月 21 日

(3) 「生活の記録」の活用

教科連絡や日記を書くための、いわゆる「生活の記録」を活用し、家庭学習の充実を図ってい

る。具体的には、次の手順で活用している。

- ① 帰りの会に、自宅で学習すべきことを考える時間を設ける。

② 考えた学習内容を「生活の記録」に記入する。

③ 「生活の記録」に記入したことを踏まえ、自宅で学習する。

④ 「生活の記録」に、実際学習したことを記入する。

⑤ 翌日の朝の会で、学習状況を確認する時間を設ける。

6 保護者・家庭、地域の連携

本校は、小規模校であり、かつ地域の方々と交えて行う行事が多いなどという実態から、保護者や地域との連携は密に行われている。そのため、教職員と保護者、地域の方々とが接する機会が多く、学校の様子や生徒の実態、今後の指導のあり方などについて、普段から理解や協力をいただいている。

資料 11. 学校行事としての行う地域の方との連携（平成 17 年度）

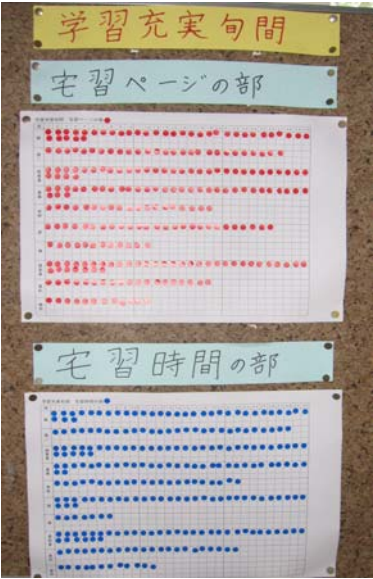
行事名	期日（期間）	内容など
花の苗植え	6 月 16 日 12 月 15 日	高齢者の方々と一緒に花の苗を植える。
高齢者合唱	1 学期～2 学期	週 1 回、地域の高齢者が中学校で合唱の練習を行う。
熊野江小・中合同運動会	9 月 11 日	熊野江・須美江地区、小学校と合同の運動会。
ふるさと祭	10 月 30 日	小学校との合同の文化祭に、高齢者合唱や大正琴クラブが出場。地域の方の、絵画や手芸品などの出品もある。
フリー参観日	12 月 5 日～9 日	地域の方が自由に参観。
リサーチ発表会	12 月 18 日	リサーチタイム（総合的な学習の時間）の発表会に地域の方々が参加。
ふれあい交流会	2 月 23 日	高齢者の方々と、グランドゴルフ大会を行う。

7 成果と課題

平成 16・17 年度の実践を中心に述べたが、本校の学力向上に向けた取組は既述のように約 20 年前から行われている。特に平成 15 年度からは、基礎・基本の確実な定着や学力向上を中心に校内研究に取り組んできた。その成果を「教研式標準学力検査」（4 月実施）で見てみた。2・3 年生の全国偏差値を、入学時と本年度で比較すると、右の通りである。このほかの諸検査でも、良好な結果を残している。

しかし、本校の卒業生を見ると、高校進学後の成績が伸び悩んでいる生徒がやや目立つ。確かに通学の不便さから、十分な家庭学習の時間を確保することが難しい。だが、自主的に学習しようとする意識付けや態度の育成がまだまだ不十分であったことも背景にあると考えられる。このことの改善が、本校の今後の課題である。

資料 10. 学習充実旬間の掲示板



資料 12. 「教研式標準学力検査」（4 月実施）に見る全国偏差値の推移

	入学時		本年度
2 年生	62.1	→	66.0
3 年生	51.3	→	55.0

備考) 数値は、全国偏差値の学年平均。